

一家收入に於ける世帯主收入の地位

世帯主 収入	收 入 階 級	計	無 世 帯 主	合 計
以下五圓	一〇	一	五〇	一三八
四圓	一五	一	四五	一三九
三〇	二〇	一	五五	一四〇
二五	三〇	一	六〇	一四一
三〇	三五	一	七〇	一四二
四〇	四五	一	八〇	一四三
五〇	五五	一	九〇	一四四
六〇	六〇	一	一〇〇	一四五
上四	計	一一一	一一一	一一一
無 世 帯 主		一一一	一一一	一一一

〔説明〕本表は一家の全收入中世帯主の收入が如何なる地位を占めてゐるかを見んとしたものである。先づ世帯主にして全然無收入なるものが一四%強を占めてゐる。

世帯主收入が一家收入(收入階級)と一致するもの即ち縦欄横欄の同額の交叉せるものは世帯主が一家の全收入を支持するものたるを示し、世帯主收入額が一家收入額より低きものは家計に對する家族の協力が多分に含まれてゐる譯である。

〔考察〕本表を見るに縱欄横欄の同額の交叉が概して多く五十七世帯に達してゐる。即ち全數の三一%強は世帯主のみの收入で一家を支へてゐる譯である之に次で世帯主收入は一階級の低額が多いのは何と云つても世帯主收入が一家收入の大部分をなしてゐることを立證してゐる。しかし一家收入の高位に上るに従て世帯主收入の地位は必ずしも之に追隨することが出來ずして略々三十圓乃至四十圓程度を彷彿してゐる。四十圓階級の如きは世帯主收入は三〇圓が十一といふ多數を占めてゐるのは、世帯主の收入と其高限度が知るべきのみといふことな物語る。一家收入七〇圓の階級に於ても世帯主收入がその中の四十圓程度にしか至つてゐないのを見ても這間の消息を解するに足りる。

(三) 支出關係

支出關係はカード階級生活に於て最も注目すべきものゝ一である。しかし生業に關係する支出たる材料費運轉費、業務費等の關係は此種階級に於ては甚だ複雑なるものなると彼等が確たる見解なき爲め終に調査の統計的なるものを得ることが出來なかつたのを遺憾とする。かかる動態的調査は或期間繼續的なることを要し且つ鳥瞰的生活調査の形式によらずして寧ろ生業調査を主とするが又は之が生計消長を知る爲めチビカルな或家計につき調査するを可と信する。

かかる理由から本項は當初の趣旨に基き生計上の支出の調査のみに限つた。表に題して生活費といふも眞に彼等が文化的生活を營むに要する一切の生活費の意味でなく、現状に於ける生存生活、生計生活の範圍に止まるものである。

世帯人員に依る生活費

カード階級者がその世帯人員に依て一世帶幾何の生計費を要するかは頗る興味ある問題である。

標準的生活費に就ては第一編に於て之を述べて概括的に其標準を示してあるから參照されたい。但し本表と異るは前者は一般的にかくあり得べしとする標準であり本表は現實の事實に基くもので種々の缺陷や冗過をも其まゝに表はしたものである點である。

人 員 別 生 活 費

世 帯 人 員	生 活 費	計
七六五四三二單	以下五圓	一一一
人八人八人八獨	" 拾圓	一一一
一一一	四" 拾五	一一一
一一一	四" 拾五	一一一
一一一	二" 拾	一一一
一一一	" 五圓拾	一一一
一一一	四" 拾	一一一
一一一	" 五圓拾	一一一
一一一	四" 拾	一一一
一一一	" 五圓拾	一一一
一一一	六" 拾	一一一
一一一	" 五圓拾	一一一
一一一	七" 拾	一一一
一一一	不 明	一一一
		計
一一二二二四二		一一一
四五四一六三七		一一一

〔考察〕 本表の数字から次のやうなことが見られるのである。

第三節 貧困原因に際する事項

こゝに注意すべきは五人生活以上は亂調子になつてゐる。五人生活の如きは四人生活と同様といふことになつてゐる、これは四人、五人、六人といふ程度になる。経費はその世帯の繰り廻し方によつて如何様にも融通し得ることを示すものであらう。大體に於て人數の増加に従つて支出階級の向上は争はれない事實だが、そこは四人以下の向上率で律することが出來ないことを云へよう。

第三節 貧困原因に関する事項

貧困の原因を調査することは至難中の至難事である。何となればカード階級の貧困に陥る原因是必ずしも單調でなく幾多の原因の競合であり、複合であり、共生であるからである。而して夫れ等原因には近因あり遠因あり、不可抗的あり、可抗的あり、更に個人的に生じるものあり社會的に生ずるものあり相互共幫して生長することもあるからである。加之之を知悉するには世帶主等の供述や四圍の事情を基礎とせざるべからざるのであるが、これが眞相を捜み調査の正鵠を得ることが容易に出来難いからである。

本調査に於ては戸々に就き窮迫事情を聽取し、四圍の事情と世帶主其他の供述に基盤を置いて、その原因なるべしと委員に於て認定し得らるゝものを擧げて見たのである。

陸續足音圖

方に名せんに成る。而して、
蔭に存することは争はれない所である。

種別	原因	主因	副因	計
死亡失踪傷害疾病	生計主人生計	女男女男女男女男	第一種	第三種
酒癖	橫着	三一 八三七二八一三一	二 二一六一三一二	
浪費	浪費	一六一三一三一	一四一四一三一	
老衰	又ハ失敗	一二一三一二一	四二二六二四一	
多數	死亡疾病	一八一四一三一	三二三一八一	
其他	其 他	二七一三一二一	一一八一一二	
不明	計	二二三一八一五一	一	
		五二二七二四 三八四七五二四九	一	

〔考察〕 一、總體を通じて見て生計主の死亡失踪といふのが最多である。生計の主なる者の缺欠が如何に一家が窮屈に陥れるかの點等を全體の數字の二三%に當つてゐることは、言葉を換へる事の種の貧困原因の蓋然性が生計主の缺欠といふことに関し二三%が襲來するものと断して差支はあるまいと思ふ。

一、次に最多は家族の多數といふこそである。實に「貧乏人の子供澤山」といふ語もある通りに、世帯構成人員の多數は前來の諸表に明かなる所であつて三人世帯以下の群に於ては二人世帯が多いが四人以上の群に於ては五人世帯が多い。多きは十人世帯もあるのである。彼等の少額なる收入を以てして此の如き多數の家族を擁することは實に大なる負擔である。

前諸表を見る上に特に注意せねばならぬのは表中の數字は現住人口であるから生計困難なる家庭に於ては事實上、里子にやつたり働きに出したり、出奔するに任せたりしてゐることである。それを考慮に入れて考へる事、一母帶當り人口が平均人口に近いから見て貧困原因の本記述を否定することが出來ないのである。

一、次に最多なのは生計主の疾病傷害である。これも生業の停滞となり收入の減少となり貧困の原因となることは大なる事實である。この點は猶次表を参照されたい。

職業別に見たる貧困原因

職業別に種々特殊原因の存することも争はれない。左表は職業に於ける貧困原因の傾向を示す。

業別	原因	漁業		農業		商業		日雇業		其他の業		計	
		男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
死亡失踪	傷害疾病	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三八三五
酒醉	横著	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三一
浪費	老衰	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	三二
業務不振	又ハ失散	多數	死亡	其	不	其	不	其	不	其	不	其	一二
家族	死	亡	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	一二
家族疾病	計	七〇一	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	七〇	七一

〔考察〕漁業に於ける貧困原因の特色は家族の多數に最も強く表はれてゐる。次には生計主の傷害疾病次には老衰である。蓋し漁業の如き労力を経験を要する作業は當業主の傷疾や老衰は重大問題である又その危険が多いのである。

農業に於ては業務の不振と、生計主の死亡失踪であることも自然である。商業、日雇等の業務にありては共に生計主の死亡失踪が著しく多い。殊にそれが女世帯主の上に表はれてゐるのは、働きの中心であつた主人が死亡又は失踪して女世帯となり貧困に陥つたことを如實に表はしてゐる。

第二章 少額収入者の住宅状態に關する考察

第一節 住宅に關する事項

漁村に於ける住民の生活は概して低く殊に住屋の如きは全く體裁外觀を整ふることなく、出漁する者が住宅に意を用ひざるは自然なりとするも漁夫にあらざる者と雖も概して家屋に無頓着にしてその構造、結構は

勿論、採光通風其他衛生的設備の如きも農村に比すれば劣つてゐるやうである。就中漁村に於ける少額収入者の住宅に至つては屋根は低く、屋内は暗く、床は低く、通風採光共に宜しからず、加ふるに井戸便所の位置設備に缺くる所があるものが多いのである。彼等の多くは借家であるから自己の思ふ如き家を得られないことは勿論だが、家主も家賃の低額のためもあらうが衛生的考慮を無視し、破損に對しても修繕の十分ならざるより来る不潔、陰鬱、狹隘なるものが可なりに多い。人若し戸外から家中に入ると暗くして暫く物を辨せざる如き家屋もある。便所の如きも戸外に露出せるものすらありて加ふるに厨との距離の近きものなどは夏季蠅の傳播による傳染病の危険が多い。しかし乍ら漁村にはかかる状態であるに拘はらず我々が想像する程傳染病の流行しないのは、彼等は空氣清き地に住み潮風に當りてよく働き、身體が頑健なるために罹病率が渺いのであるかも知れない。

以下掲ぐる所の住宅状態は第一種、第二種、第三種に屬するカード階級の所謂少額収入者のそれであるから一般に比しレベルが低いことは當然である。左に各種の事項から見たる各階級の状態を點検しよう。

屋根種別より見たるカード階級

葺種	カード	階級	第一種			第二種			第三種			計
			墨名	出水	串濱	濱勝浦	計	墨名	出水	松部	串濱	計
杉葺	瓦	一一一										
亞	瓦	一一一										
皮	鉛	一四四										
葺	葺	一二一										
亞	瓦	一八五										
瓦	皮	一五五										
亞	瓦	六五六										
瓦	皮	一五二										
亞	瓦	一四二										
瓦	皮	一八三										
亞	瓦	一三一										
瓦	皮	二一九										
亞	瓦	二一四										
瓦	皮	二八八										
亞	瓦	一六六										
瓦	皮	一〇五										
亞	瓦	一二四										
瓦	皮	一四〇										
亞	瓦	三五四										
瓦	皮	五四六										

〔考察〕右表に依て見ると第一種第二種は葺葺、第三種は亞鉛葺が最も多い。葺葺は概して古い家屋であり亞鉛葺は比較的新しい建物であるが、何れも粗造が多い。

家の方向と其良否より見たるカード階級

家は其戸口が向へる方向を以て家の方向と考へると左表のやうに各種を通じて南向が最も多い、之に次で

は西南と東南である。西南の多いのは勝浦の港が西南に開けてゐる爲であるかも知れない。方向の良否とは家の戸口が崖に面してゐるとか不潔物や危険物やに相對してゐるとか然らざるとかの區別から之をなしたのである。漁村では隨分崖の上に危く立つてゐる家や、斷崖を前にして建つてゐる家などもある。

家の方角を其處否より見たるか一ト階級

家ノ方向		不中良	
良		名墨	
一	一	水出	第
一	一	濱串	
一	六	勝濱浦	種
一	一	浦	
二三八		計	
名墨		一八六	
水出		七八三	
部松		一三四	
濱串		一三六	
勝濱浦		一三九	
浦勝		一五一	
三	二	計	種
九〇八			
名墨		一二一	
水出		七八四	
部松		二五五	
濱串		一五二	
勝濱浦		一一四	
浦勝		二八七	
三	二	計	種
二七二			
名墨		一二一	
水出		五六七	
部松		二八九	
濱串		二九四	
勝濱浦		一五四	
浦勝		一三三七	
二	一	計	
二七八	八		
三〇八	八		

坪數に就て見ると至難を遁して十坪の様のか最も多いのであるが、階級別に見ると多少その中心が違つてゐる。最多は第一種は十坪、第二種は七坪、第三種は五坪である。これは一見生計の寛かなるものほど坪數が少い奇現象を呈してゐるが、之を仔細に分解して見ると世帯員數との關係もあつて必ずしも無理のないことが判る。又總體に就て概觀すると第二種は第一種より、第三種は第二種よりも多數群の多いのは、彼等

統計表中の世帯構成人員の表に参照されたい
建坪数より見たるカード階級

第一種の十坪の最多なのは前章世帶構成員表に對照するを五人世帶、七人世帶の如く比較的多人數の世帶の存するためである。ここが判る。尤も絶對數が少いのであるから、之を通則として見る譯に行かない。第二種に於て最多より數へて七坪、十坪、八坪、四坪の順序になつてゐるが、之を前章の世帶構成人員表に對比するを世帶構成人員表中最多順序は一人、二人、三人乃至五人、六人、七人、八人、九人、十人、十一人、十二人、十三人、十四人、十五人、十六人、十七人、十八人、十九人、二十人、二十一人、二十二人、二十三人、二十四人、二十五人、二十六人、二十七人、二十八人、二十九人、三十人、三十一人、三十二人、三十三人、三十四人、三十五人、三十六人、三十七人、三十八人、三十九人、四十人、四十一人、四十二人、四十三人、四十四人、四十五人、四十六人、四十七人、四十八人、四十九人、五十人、五十一人、五十二人、五十三人、五十四人、五十五人、五十六人、五十七人、五十八人、五十九人、六十人、六十人以上である。第三種になるを建坪數は最多より五坪、十坪、六坪、八坪、十二坪を云ふ順序で、世帶構成の方は二人、三人、五人、四人、七人の順序である。

室数より見たらカード階級

室數も亦世帯員數と關係を持つことが深い。第一種では一室若は二室が最多、第二種及第三種では二室、一室の順序である。

疊敷より見たるカーテン階級

はレベル低く、カード階級内に於ても種別に依り等差あるべきは自然である。

〔考察〕 一世帶に於ける疊敷は第一種に就ては少きは二疊、多きも二十疊である。十疊、十一疊といふ所が最も多い。第二種に就ては少きは二半、多きは二十四半である。最多は九疊乃至十二疊である。第三種に就ては少きは四半、多きは二十五疊である。最多は六疊、十疊、十一疊といふ所である。これを各階級別に一人當疊敷を計算して見るを左の如くである。

住居床下の高さとカード階級

床下は第一種は床下一尺が多く、第二種及第三種は床下一尺五寸が多い。農家のそれに比すれば幾分低く感せらるゝが漁村としては一尺五寸は高い方である。

一一八七	麻
尺	下
一寸尺寸寸	
一一一	名墨
一一一	水出
一五一	濱串
一一一	勝濱浦
一一一	計
一六一	名墨
一三一	水出
一六二	部松
一一一	濱串
一四一	勝落浦
一一一	浦勝
一二一	計
一	
二五二	
一一一	名墨
一三一	水出
一一一	部松
一一一	濱串
一一一	勝濱浦
一一一	浦勝
一一一	計
一八一	

換氣採光汚水排泄の良否より見たるカード階級	二
	尺 尺 尺 尺 尺 尺
	八 六 五 四 三 二
	尺 寸 寸 寸 寸 寸 寸
	一一一 一一一
	一一一 三 一一一
	一一一 三 一一一
	一一一 二 一一一
	一一一 二 一一一
	一一一 三 一 三四
	一一一 三 一 三四
	一一一 二 二 一 二
	一一一 二 二 一 二
	一一一 一 一 一 一 一
	一一一 一 一 一 一 一
	一一一 一 一 一 一 一
	一一一 三 一 一 一
	一一一 三 一 一 一
	一一一 二 九 二 三〇
	一一一 二 九 二 三〇
	一一一 八 一 一 一 一
	一一一 八 一 一 一 一
	一一一 一 一 七 六
	一一一 一 一 七 六
	一 二 一 三 一 四 二
	一 二 一 三 一 四 二
	一 二 一 三 一 四 二
	一 二 一 三 一 四 二
	一 二 一 三 一 四 二
	三 一 一 三 一 一 一
	三 一 一 三 一 一 一
	四 一 三 二 二 〇
	四 一 三 二 二 〇

不中良	換
良	氣
一二一	名墨
一十一	水出
一一六	濱串
一一一	勝濱
三三七	計
三七四	名墨
九六三	水出
一五一	部松
二一八	濱串
一七五	勝濱
二三一	浦勝
二二二	計
七八二	名墨
二一五四	水出
七八四	部松
三四五	濱串
二二三	勝濱
一一四	浦勝
四六七	計
一二五	名墨
八六七	水出
一一四四八	部松
一一七四七	濱串
四九六	勝濱
二五三七	浦勝
一二八〇	計
六九八	名墨
三五八	水出
八七六	部松

不	中	良	
貞			
二	一	一	名墨
一	一	一	水出
一	二	五	濱串
一	一	一	勝浦
三	四	六	計
四	七	三	名墨
一	〇	五	水出
三	二	二	部松
四	一	六	濱串
四	五	三	勝浦
二	四	一	浦勝
二	二	一	計
七	三	七	
二	一	〇	名墨
七	九	三	水出
一	六	五	部松
二	二	三	濱串
一	一	四	勝浦
六	五	六	浦勝
一	三	四	計
九	三	九	
二	六	九	名墨
一	一	八	水出
四	八	七	部松
二	七	四	濱串
六	六	八	勝浦
八	九	六	浦勝
四	六	七	計
九	〇	二	

不中良		第一種
良		
一一一	名墨	
一一一	水出	
一一一	濱串	
一一八	勝濱浦	
一三〇	計	
三三八	名墨	第二種
二	水出	
三五〇	部松	
一三四	濱串	
一一〇	勝落浦	
一一〇	浦勝	
一二二	計	
一四九四四	名墨	第三種
四四二	水出	
一四五	部松	
三一八	濱串	
一一六	勝濱浦	
一五	浦勝	
二四一	計	
一七〇四七	名墨	
七八一	水出	
三〇五	部松	
三四二	濱串	
一二七	勝濱浦	
二一三	浦勝	
四六三	計	
一三九二三		

「考察」

換氣はあまりに不良なるものは珍しい、第二種の「中」の外は、第一種第三種共に「良」が多い、蓋し日本の家屋は換氣といふ點に於ては西洋風建築よりも宜しいのである。

排水は第一種、第三種が最も多く、第二種に至っては「不貞」が最も多いが、第三種の如きでさへ不良が全數の二割を占めてゐる。これは窓が少く屋一、汚水排除は都會とは違ひ比較的良好である。各階級を通じて良が最も多い。

住屋所在地の地勢及附近

溫普乾	河	海岸	丘	低	山	平	
潤通燥	(平)	(坦)	(平)	(坦)	(平)	(坦)	
	岸	坦	地	陵	地	坦	
- - -	1	1	1	1	1	1	-
1 - -	1	1	1	1	1	1	-
1 1 8	1	-	1	1	1	1	1
- 1 -	1	1	1	1	1	1	-
1 -	1	-	1	1	1	1	-
2 - 0	1	-	1	1	2	1	1
1 -	1	1	1	1	1	1	-
- 1 3	1	1	1	-	1	1	九
六 2 9	2	1	1	1	1	1	1
3 1 2	-	1	1	1	1	1	1
- 1 9	1	3	1	1	-	1	1
5 1 7	1	1	-	1	1	1	1
3 1 3	1	1	1	1	1	1	1
1 4 9	1	1	1	1	1	1	四
2 1 6	1	1	-	1	1	1	1
2 3 3	2	1	1	1	1	1	1
5 1 6	-	1	1	1	1	1	1
2 1 5	1	2	1	1	-	1	1
1 1 5	1	1	1	1	1	1	1
2 1 5	1	1	1	1	1	1	1
1 8	1	1	1	1	1	1	八
3 3 2	1	1	1	1	1	1	1
4 1 2	1	1	-	1	2	-	1
2	1	1	1	1	1	1	三
8 6 2	4	1	1	1	1	1	1
8 1 8	2	1	1	1	1	1	五
3 1 2	1	6	1	2	1	-	1
2	1	1	1	1	1	1	二
6 1 3	1	1	-	1	1	1	一
1	1	1	1	1	1	1	三
5 1 8	1	1	1	1	1	1	三
3 4 6 2 2	1	1	1	2	3	1	1

住居敷空地坪数より見たるか!ト階級は都會とは異り相當餘地存すべく思料せ

住屋敷の空地は都會とは異り相當餘地存すべく思料せらるゝに拘はらず表中に見る如く各階級を通して餘地は比較的少い、甚だしきは一坪未満といふさへある、さすがに第三種に於ては空地が最も多いことが表中にもよく表はれてゐる。

空地坪數より見たるカーデ階級

空地別		坪未満	坪満
名墨	第		
水出	一		
濱串	種		
勝濱浦			
計			
名墨	第		
水出	二		
部松	種		
濱串			
勝濱浦			
浦勝			
計			
名墨	第		
水出	三		
部松	種		
濱串			
勝濱浦			
浦勝			
計			
名墨			
水出			
部松			
濱串			
勝濱浦			
浦勝			
計			
名墨			
水出			
部松			
濱串			
勝濱浦			
浦勝			
計			

世帯數及家屋形態種別

建物の構造の平家、二階の區別を見るに全棟數百六十四中、二階建は僅かに三棟であつて其餘の百六十棟は平家建である、これは富の程底の低い關係や臨海地のことゝて風が強いため二階建は少いのである。平家建に就て見るに大部分は一戸建であつて三戸以上の長屋は僅かに數棟に過ぎない。

勝	計	水名	浦部濱浦	墨出松串申濱勝
				世帶數
一	八二二三三一三四 一三〇五九八六		一戶建	二階建
三一	一一一		一戶建	二階建
一	四一一三一三二三 八七七三九四九		一戶建	平
八	一二一 二三		二戶建屋長	
二一	一一一 一		三戶建屋長	
二一	一一一 一		四戶建屋長	家
一	一一一 一		六戶建屋長	
一	六二一三一二四 四〇九五九八三		計	建

室数と家算との關係

先づ室数の點から見るに二室が最も多く一室が之に次である。家賃の點かる見るに家賃不要が最も多く貰
圓以下、三圓以下、一圓以下の順次になつてゐる。家賃不要の内一、二戸に限り家賃免除のものである。

住居の室数と家賃との関係

計	室數	家賃	以五十下錢
室室室室室			
八 二六			以下圓
一 二九			以下圓
一九 二三四			以下圓
二三 五七			以下圓
七 一五			以下圓
七 六一			以下圓
三 三			以上圓
二			以下圓
三			以下圓
一			以下圓
一〇 八二五二八二	三四二	不 要	
一八	三六六		計
一三六七九六			

〔考察〕 全世帯一八一の中で殆ど其六〇%は家賃不要のものであり、その家賃不要の殆ど全部が自己家屋なる點から考へる。漁村に於けるカード階級は半數以上は家屋持たることが判る、大都市のカード階級などには到底見られ得ぬ現象である。室と家賃の關係を考察するに一室は二圓以下が最も多く、二室は五圓以下が最も多い、而して概ね一室、二室である。

疊數と住居人員との關係

疊數に於ては六疊が最多である十疊、八疊、十一疊が之に次いでゐる。而して一戸疊數の最も少いのは二疊、多いのは二十六疊になつてゐる。

疊數と住居員數との關係

四同三同二	疊數	家族員數
“牛”半疊	一	人
一一三十一	二	人
二十一十一	三	人
二十一十一	四	人
二十一十一	五	人
二十一十一	六	人
二十一十一	七	人
二十一十一	八	人
二十一十一	九	人
二十一十一	十	人
二十一十一	計	

〔考察〕

三　　疊一一四　疊半　　一　　人
數と人數との関係に係て考察するに最多が在疊業人員の標準に於ける

第一節 附屬設備に関する事項

井戸 勿論水道施設がないから飲料水は全部井戸から汲むのである。井水は概して悪くはない。しかし設備其他に於ては不備なるものは少くない。掩蓋は概して無い方である。共用が大部分で一戸専用のものは稀である。溪水を使用するものも若干はある。井戸の所在が住居から甚しく遠方にあるものも往々あつた。

備考 不明なるもの大部分共同なるものと思はるゝもカ一一下に該當記載なし
第三編 少額収入者事情篇 第二章 少額収入者の住宅状態に關する考察

不	中	良	良	井	水	否
貞				名	墨	
一	—	—		水	出	第一種
一	—	—	七	濱	串	
一	二	—		勝	浦	
一	三	九		計		
一	二	—	二	名	墨	第二種
一	二	二	六	水	出	
一	一	五		部	松	
一	一	〇	一	濱	串	二種
一	一	三	一	勝	浦	
一	四	一		浦	勝	
一	四	四	九	計		
一	八	三	三	名	墨	第三種
一	一	八	一	水	出	
一	三	九		部	松	
一	三	三	三	濱	串	
一	六	一	六	勝	浦	
二	五	〇	一	浦	勝	
二	七	二		計		
三	五	二		名	墨	
一	一	五	三	水	出	
二	一	五	五	部	松	
一	四	四	一	濱	串	計
一	三	〇		勝	浦	
一	一	〇	一	浦	勝	
二	九	一		浦	勝	
四	二	三		計		
四	七	三				

〔考察〕 井水良否は四分の三弱は「良」であり、四分の一強が「中」である。「不良」は稀であるが地域に依て見るを概して墨名、出水、松部、小濱は「良」が多く、濱勝浦は「中」が多い。

非戸の屋根及掩蓋有無

住戸と井戸、半壁の完全なるものと雖も便所との距離の少きは衛生上甚だ危険が多い。井戸は多くは木側石がけであるから完全とは云へない。しかし井戸と便所との距離は都會生活とは違つて相當に間隔はあるが稀には五尺以下のものすらあることは左表の通りである。

六二

〔考察〕 一井戸を便所との距離最多の群は一五尺以下であり、之に次いで三〇尺以上あるが、其の次で二三尺である。

附

錄

漁村に因む俗謡俚歌の數々

附

錄

漁村に因む俗謡、俚歌

漁村に於ける俗謡俚歌にもいろいろあるが、古いもの、土地に因んだもの、漁村の傭を髪髪たらしむるもの、旺に行はるもの、特に面白いと思はるものを選んで、卑猥に亘らぬ限り之を載せた。但し近頃全国的に流行する俗歌や花巷柳邊に持囃さるゝ種類のものは之を割愛した。蓋し此等の歌謡を通して俚俗を如實に描かんとするのが本記述の目的だからである。歌謡を通覽するとその内容が必ずしも整頓してゐないのみならず歌詞断片的にして首尾の理義が相通じないものもあるが。そこに自然に發生した俚謡なるものゝ傭があり、面白味が存する。その歌詞を通じて時代を見、生活を見、習俗を見、氣分を見ることが出来る。因に本記述は町誌、郡誌は勿論、漁夫の親方、講中の老婆、その他の俚人に就て調べたものである。

一、大漁節

青年團に團歌があり、學校に校歌があるやうに、漁村に大漁節のあることは當然すぎる程當然である。彼等は心中豊漁を冀ひ、また大漁を得たる喜びに酔ひ、若是その喜びを長く傳ふる心を以て高らかに大漁節を唄ふ。これは時に海神に對する真摯なる祈禱であり、時に自他に對する軒昂の意氣を示す凱歌である。かかる意味に於ての大漁節の漁村に於ける存在は強く、且つ深い意味を有する。たゞ近時俗歌の流行に刺戟されて所謂有志なるものが溢りに手前味噌の歌詞を急造するのはあらずものがなと思ふ。

千葉縣でも大漁節は至る所に作られてゐるが、最も廣く唄はれ且古き歴史を持つてゐるのは銚子の大漁節である。これは元治元年網代久三郎なる人に依て作られたものともいはれ、又一説には、同年銚子浦に於ける未曾有の大漁があり、この思出を長く傳へるために土地の素封家松本旭江なる人が作歌し、常磐津遊蝶の

節付で、清元さんが踊り手をつけ、同年の川口明神の大祭でそれを発表したものだとも云はれてゐる。何れにしても今日では銚子は勿論縣下各地遠くは他府縣にまでも唄はれ踊られてゐる。頗る賑かな陽氣な歌踊である。

その歌詞にはテクニックが大分入つてゐるから左に註釋を加へよう。

大漁節解説

一つとせ。一番づゝに積立てゝ川口押込む大矢聲。この大漁船。

(解説) 沖から鰯を船に一杯積んで歸る有様を歌つたものである。一番づゝは幾隻もしく次から次への意。川口は利根川の河口。大矢聲は櫓を押す掛け聲である。

二一つとせ。ふたまの沖から外川まで、つゞいて寄せ來る大鰯。この大漁船。

(解説) 沖から外川(地名)までつゞく漁船には鰯が滿載してある意。

三一つとせ。皆一同にまねをあげ通はせ船の賑かさ。この大漁船。

(解説) 「まね」は陸と海と連絡の爲の印(旗)を掲げて陸上の用意を促すのである。鮫漁の時のフライキに同じ。「通はせ船」は連絡船の意で、補助の運搬船である。

四一つとせ。夜晝たいともたきあまる三杯一丁の大鰯。この大漁船。

(解説) 「三杯」は籠に三杯のことを籠は丸形の小深の籠である。一杯は山盛りにする廿一貫位入るといふ。それを三杯こめるといふが一丁(六十間)流れるといふのである。たくは煮ることで鰯を煮て壓搾機で壓搾することをしめるといひ、それが夜も日も作業してまた盡きぬ程の澤山の鰯であるとの意。

五一つとせ。いつ来て見ても千鰯場は、あき間もすき間も更にない。この大漁船。

(解説) 千鰯は鰯を沙漬などて擣けて天日に干すのである。それが隙間なき迄に干されてあるとの意。

六一つとせ。六つから六つまで粕割が、大割小割で手を追はれ。この大漁船。

(解説) 「粕割り」は搾り粕を割つて(分けて)干すので、大割小割は大分け小分け(千鰯の群を)するのに手が廻らぬ程の意。

七一つとせ。名高き利根川高潮船、粕や油を積み送る。この大漁船。

(解説) 高潮船といふのは細長い巾の狭い川船の名稱である。それに粕や醤油を積み込んで運送するとの意。

八一つとせ。八田の沖合若衆が、万祝そろへて宮詣り。この大漁船。

(解説) 「八田」は八田網で今は行はれぬが昔は八田網といふ釣取りの方法が行はれた。鰯は習性としてよく沖の暗礁の上に遊んでゐるがそれを傍に網を擣けて張り鰯を漸次網の方へ追ひ込み手縄り上げて漁る方法である。「沖合」は「おつけい」で漁撈長のことをある。船の長老も若い衆もといふ程の意。万祝は大漁の時に船主から出る「仕着せ」の着物であつて、伊達模様のついた中に船の定紋などを染抜いてあつて、よく漁師は晴着に之を着て歩く。殊に大漁の後には漁夫は之を着て氏神へ詣るのが例である。

九一つとせ。この浦守る川口の明神御利益あらはせる。この大漁船。

(解説) 銚子浦には川口明神といふがあつて、漁夫の信仰を繋いでゐたのである。

十とせ。十を重ねて百となり、千を飛越す万漁年。この大漁船。

(解説) 盛漁で大に儲かることを唄つたもので万漁年は「万兩年」に通はせてゐるものか。

因に勝浦にも大漁節が作られてある。「濱勝浦大漁節」「松部の大漁節」これである。何れも近年の作である。

大漁節(濱勝浦漁業組合作)

一ツトセ。日の出の勢ひ濱勝浦。漁業組合販賣所。ハマ大漁ダネ。

二ツトセ。フライ旗押したて勇ましく。乗込む遠洋漁業船。

三ツトセ。港は岸ふか波静か。陸揚機橋便利よし。

四ツトセ。よりくる鰯船鱈船。鮪かじきは山と積む。

五ツトセ。いさむ若衆漁乙女。水揚こわけの賑かさ。

六ツトセ。睦みしたしみ組合は。親切第一標語さし。

七ツトセ。名高き鳥山大漁場。近くに控ひしの港。

八ツトセ。八幡岬から黒ヶ鼻。かけて築出す防波堤。

九ツトセ。これさい出來れば此漁は。何時も大漁でしけ知らず。

十トセ。遠見岬神社の御利益で。此の漁繁昌御目出度ヤ。

大漁節(松部遠洋漁業會社作)

一ツトセ。人に先だち松部浦。
二ツトセ。船は大型しけ知らず。

三ツトセ。南は南洋塵つり。

四ツトセ。寄せ来る波も吹く風も。

五ツトセ。入り来る松部の會社船。

六ツトセ。無限の寶倉の鍵握る。

七ツトセ。夏春輕に冬鮪。

八ツトセ。八百万神を守ります。

九ツトセ。黄金の花咲く大漁に。

十トセ。トサ〜松部は日本一。

十七トセ。七難數々現れて。

出來た遠洋漁業會社。ハマ大漁ダネ。
乗込む船頭さんは胸揃ひ。//
北は千島の鮪漁。//
フライ旗中旗ヒラ〜ぞ。//
漁士は御國の寶なり。//
秋はさんまの山をなす。//
海の幸ある松部浦。//
万祝揃へて宮詣り。//
萬歳〜萬々歳。//

一一、勝浦俗謡 その一（土地に因むもの）

基句

音に聞く。上總勝浦よいところ。前は海原浪白く。後ろは樹々の山青し。

江戸が見だけりや勝浦へござれ。勝浦覺翁寺さん江戸まさり。

海水や夏の遊びは勝浦に。浪は静かに遠浅で。女子供の樂泳ぎ。二人浴びましよ砂風呂を。

金波銀波の波打ち際で。酒の機嫌の千鳥足。

夏の夜の嬉しい夢も明けやすく。窓をあければ千代が島。舟の通り路真帆片帆。磯で男波がざんざ打つ。

船頭さんより棹さしよりも。沖でまゝ炊く主がよい。

（註）船頭はさも櫓の、こ、棹さしは棹張りの、こ、何れも上役なれど、そんな人よりも賄夫である主がよいとの意。

勝浦三丁誰が名を付けた。あれは植村土佐守。

（註）遠見崎、覺翁寺、本行寺は共に勝浦の名勝古寺。三町は上町中町下町の、こ。

有明や涙かくして出す舟の。わづか小雨も氣にかゝる。窓を開ければ茜さす。フライキ押立つ主の船。

親爺籠出せ島山がよりだ。今朝ももろ船又三艘。

神奥三つから來た仙臺からでもきたのか。仙臺は米のねがいくらする。

そろた〜よ踊子がそろつた。稻の出穂よりまだそろだ。

歌題目

一ツトヤー。東の果の安房の國、

二ツトヤー。二親様は二世の爲め。

三ツトヤー。身なすてられめと義を定め。

四ツトヤー。夜打焼打大難も。

五ツトヤー。伊豆の伊東に流さるゝ。

六ツトヤー。むじつの難に流されて。

七ツトヤー。難に遭ふのも國のため。

八ツトヤー。矢先きおそろし東條の。

九ツトヤー。此國惡寃の世となるか。

十トヤー。そがなき御身を龍の口。

十一トヤー。江の島かたより光もし。

十二トヤー。二人の御使者は御奉書石き。

十三トヤー。十三日は依智の里。

十四トヤー。死なば救され佐渡の海。

十五トヤー。五瀬の老婆なば塚原に。

十六トヤー。船をさそりて阿佛坊は。

十七トヤー。七難數々現れて。

南無妙法蓮華經。

小湊浦にて誕生ましまし。

清澄寺にて出家なされし。

建長五年に唱ひはしむる。

不思議やお通れたまひけるそや。

御身となるのも御題目。

流されながらも天下泰平。

安國論にて四個の格言。

小松原にて疵を蒙る。

諸宗の讒奏をお取あけてな。

太刀ふりあければ太刀折れり。

御殿はものゝげ不思議じば〜。

梅に御星は降りまします。

後の世照すか波に題目。

あへ川にて渡し渡さる。

鍵笠住居で釋迦の御使。

夜な〜御祖師へ給仕し玉ふ。

御祖師召させて赦免さる。

十八トヤー。八千餘艘の蒙古船。

十九トヤー。九年か間は身延山。

二〇トヤー。二世をあらはす御ために。

妙法蓮華經の風にくだかる。
御經しづかに閑居ます。

//
//

裏め詞

あゝ暫くやへ。しばさ留めたる此奴。チヂクトシばかり褒め申さう。褒める作法は知られども。大黒さいふ人は。一に寶をふんまへて。二でにいり笑つて。三に三叟つんで来る。四つ世をしのよい様に。五ついつもの綱代寄り。六つむせうに積んで来る。七つ何事ないやうに。八つ山場へほし上げて。九つこゝで僕にして。十で問屋へ送りつけ。十一で爲替をかりて。十二で若衆に貸し申したさ。ほゝ敬つて。褒め申す。こりや又一座。納屋づけ繁昌すんまいた。

(註) 船の新造、紐解祝など芽出度い宴席で褒める言葉である。綱代寄りは綱代沖の大漁の意。山場へ干し上げては鰯の天日乾である。これを僕にして江戸へ送るので、問屋から爲替を借りて若い衆へ金を貸したといふ、漁村の風習が詞の裡に活躍してゐる。

船 噴

押せよおせへ二挺槍でおせよ。押せば港が近くなる。

(註) 昔の遠洋漁業の歸途の心中を唄つたものならん。

こゝれ松葉を手ではきよせて。主の來るのを待つ。

(註) 出稼漁夫の家庭に殘る妻女の心理。

昔若いさきや袖襷ひかれ。今ちや子供に手をひかる。

人目あるゆへ一度は切れて。水に浮草根は切れぬ。

虎は千里の姫さい越すが。障子一重がまゝならぬ。

ふぐで上りてげんばでのんで。戻りは赤えのへらへら。

(註) ふぐは腹のふくれたる魚。げんばは皮を剥きて食ふ魚で皮は厚い。赤えいはかれに類して真赤な魚類である。唄の意は料理屋へ上る時には如何にも鍋中の暖かく見える様に衣裳を着込んでふぐの様になつて上るが、一枚ねぎ二枚ねぎげんばのやうに裸にされて、戻りにはそれで眞赤に酔つて赤えの如く赤く且つへらへらであるといふ。漁村特有の風趣のある唄である。

三艘ならべてまあみの袖へ。たゞせておきたいわしの妻。

(註) いわし漁の船であらう、三叟で出漁するそのまあみの船の袖先にわしの妻を立たせて皆に見せてやりたいと云ふ。珍らしく美妻を持った漁夫の自慢心境、無邪氣でよい。

追 分 部

勝浦港は入ればにやよいが。出ばになぐれにや波が立つ。

來てはござんざ、雨戸へあたる。心まよはす南風。

勝浦辨天さま荒神さまよ。今朝の出船の足よとめる。

盤城相馬の金さるよりも。はれた勝浦に居るがよい。

數へ唄「お萬布晒し」

この唄は勝浦萬信謡(信仰團體)の講元關莊松の作だと云はれてゐる。土地の老翁老婆に依つて唄に唄はれ又踊られる。近來は両手に花笠を

持つて踊るのである。お萬様の由來は大要左の通りである。

上總勝浦城主正木左近太夫那時は小田原の北條左衛門氏堯の女を納めて室をなしたが一男一女を擧げた。於萬の方は其長女にして天正五年當城に生る。全十八年九月十三日夜勝浦城將に没落せんとするや母を伴ひ城を抜け出し百尺の絶壁を事ともせず樹木の根方より白布を傳ふて下り、船にて逃れ伊豆の江川太郎左衛門の許に寄寓し、二十二歳の慶長三年徳川家に官使し、同七年三月七日紀州家の祖賴宣卿を生み同年八月十日水戸家の祖賴房卿を生む。承應二年八月二十一日享年七十七歳にて卒すと云ふ。

歌詞

一ぐせ。人も知つたる。おまんさま。生は上総の勝浦で。城主正木の息女なり。

二ぐせ。ふな、び。見られぬ。勝浦の。しろは。ほつらく共時は。御とし。わつかに十四才。

三ぐせ。みのけしよだり。せりべきな。布をさらして。お万様。母をさもなし。おちのびる。

四ぐせ。夜はものすこき海上な。百里のじさう。ものさせす。伊豆の江川に身をよする。

五ぐせ。いつか世に出ん。にら山の。春秋すごす。九年目に。家康公へ。宮へかへ。

六ぐせ。むづまじ。まごいのかたらじに。生る、御方は。よりのぶきよう。紀州祖先さ。なりたもう。

七ぐせ。なにより。めでたき。そのうへに。かさねて生る。よりふさきよう。水戸家の祖先さあながる。

八ぐせ。山にこもりて。御所様の。ほだいをさむらう其ために。日蓮大師に。きゑーする。

九ぐせ。心の月の。かけはれて。かみをおろして。あまさなり。七面山にきがんする。

十ぐせ。所は身延の。大野山。七十七にて。せんげする。今だにのいる。れいちなみ。

東上總の五十座廻り

歌詞

勝浦港で身を清め。本に行者の寺参り。新坂難所の峠を越へ。音に聞へし権の木寺よ。茲は新戸の長慶寺。
波に千島は串濱村よ。參詣しましよ。惠日寺でらよ。

濱邊ゆるへ守谷迄。朝口かゞやく本壽南無妙法蓮華經法蓮寺様よ。アリヤ有難や觀音様。

こゝは松部の妙潮寺。四挺櫓五丁るで浪押し分けて。灘はかんさの鬼が島。納めますぞよ川津の津慶寺。

（註）雜

勝浦の濱で相撲をさつて。川津かけられ投げられて。灘倉くらへ日がまはり。新官つかれて部原が痛い。堂坂々々。

（註）・・は皆勝浦附近の地名。

今年や代がよい豐年ごしてな。お濱は大漁で丘万作で。お村の若衆一同に揃うて。西の上總の狩野山様へさ。參詣に參りし其や歸りに。木更津宿へこ通りかゝるよ。木更津宿はな名所で御座るよ。なせと云ふのに通りが三筋に分れてこ座るよ。前なる通りは漁師町通りよ。上なる通りは寺町通りよ。中なる通りは仲の町通りよ。仲の町越ゆればあまた旅籠や數多うござるよ。數ある中にも伊勢屋に葛やに龜屋と云ふてな。音に聞えし伊勢屋と云ふてな。其や姫は扱もよい兒だ。一夜明ければ綿綿たすきでお洒落きめ込門に出揃ひ。頃は六月中ばの頃にて。花のお江戸のお山參詣の昇り降りのお客さんが通ふれば。是もしお客さんお昇りなればなお休み下され。お降りなればなお宿り下され。なんのかのとてつまさり袖ひき引がれて。お客様の申する事には。わし等はごくでも里の日高にまだ宿早いが。今宵一夜はおまいさんに引がれて伊勢屋が宿だよ。木更津けさ立なんと友立の娘はなる程よい兒だ。花にたそへて申するなればな。正月二月は海に紅梅。三月櫻よ。四月は卯の花。五月あやめよ。六月野に咲く小笠の中にも。ちらへ見ゆるが野百合の花だよ。七八九月は桔梗にかるかや。又もよいのが吉野の山のな千本櫻よ。其やお枝を上枝なりとも下枝なりとも折りて。其枝の土産に持ちて歸らせ。木更津文句もまだ先や長いが。餘りに長がけりやお客様休廻。踊り子も休廻。私は尙更へらで切ましよ。

播州高砂攝摩の國でな。高砂子爺様とおの江の母様が目籠をしよ。そろ糸を手にもち熊手をかついて。寶の山へこそろへ登りて。松の葉やすゝきのかれ葉を熊手でかきよせ。ほうきではきよせ。目籠につめてな。そこで暫く御休息なさるよ。松に手をあて上を見ればな。お鶴の巣ごもり女鶴に男鶴が羽がへをやすむる。下を見ればな小池がござるよ。小池の中には女鶴と男鶴が四足をそろへて。稻穂をくわへて。空ながむる。それこそ目出たいそろへ寶來山から此や家方へお初に参りて。お家の構を拜見致せば。前は大海後は松原。いろは倉さて四十八ごめ御座るよ。お家を見ればな。八方せがいでハフ造りて。敷石土台はなんばん鍛でな。柱白金から金たる木で。二階はびろごて張りつめられてな。なげ押を見ればななけしの廻りは。赤銅おのべそろ欄間を見ればな。鶴亀松竹浮彫けはりて。戸障子の骨組したん黒たん矢羽根に

根中通るなら清澄出して通れ。灘は關東の鬼が島。
月は白々沙汲む乙女。夢のやうだよ安房上總。

老爺や跳子で松岸通ひ。金は持てない浪枕。

（註）おまん可愛や八幡山で。いのちさられたぐみの枝。

（註）おまんは濱勝浦の大工の娘で、山へ遊びに行き、ぐみの木から轉んで死んだと傳ふ。

三、勝浦俗謡 その二

子 守 咽

雪も來い。あられも來い。覺翁寺さまの柿の木も。こうい來い。

おまん可愛や八幡山で。いのちさられたぐみの枝。

（註）おまんは濱勝浦の大工の娘で、山へ遊びに行き、ぐみの木から轉んで死んだと傳ふ。

（註）昔のお邸泰公の子守の心理がよくあらはれてゐる。

よいへよいつちに嫁が來た。算箇長持はさみ箱。さらばと仕立てゝやるからは。二度と再び歸るなよ。それはさゝ様御無理だよ。西が墨れよいへよいつちに嫁が來た。算箇長持はさみ箱。さらばと仕立てゝやるからは。二度と再び歸るなよ。それはさゝ様御無理だよ。西が墨れば雨さなる。東がくもれば風さなる。千石積だる船でさへ。雨風嵐には出てかへる。

泣なよいへ赤ちやんよ。風がざんざん吹て來た。ざんざん風はどこへ行く。遠いへ海のはて。そして歸りは春の頃。お花のたんさ咲た頃。野にも山にも咲いたさき。ほうち。ねんねをおしなさい。善い子の赤ちやん。ねんねしな。

れんへねれした。わんねの御守はシヽく行た。あの山ヽみてお里へ行つた。お里のおみやげになにもるだ。でんへ太鼓に笙の笛。想やあかりにほしにかぶ車。ヨイ。

ほらよ。ほらよ。せあせんが。夜なくに繰つゝて田を落した。其の田をひらくひ川田かゝつた。ヨイ。

漁村田唄

なよ。なよ。一ひヽへ。二ひヽへ。三ひヽへ。川川川。國ふ國ふへ。ふかねばか。いれかへ。おみつへ。ならへへへ。おかふへ。おひだめへ。みうかね。三、四、五。川川川。國ふ國ふへ。だいりか。おぞしへへ。かはりらへ。はさみへへ。お

みかへへ。川津へへ。澤倉へへ。新官へへ。部原へへ。部原へへ。五郎兵衛坂。あぶない坂だよ。おしたへへ。山にあつたか

雜 嘴

かいぬへ。籠中の鳥は。うづへ出逢ふ。夜中の時分に。一寸出でつんむぐる。(遊戯の時に用ひ)

子かひゞへ。子はないなごそ。其の子はなんだ。提灯屋のまゝの子。取るたらとつて見る。(同)

手 糸 嘴

今日も日がよい。あすも日がよい。こんにち今晚となりの恵比壽講へ。なはれて行たら。おたひの吸物。小だひのさしみに。膳椀そろへて。箸は柳で。一杯すゞませう。二杯すゞませう。三杯すゞませう。四杯すゞませう。五杯すゞませう。六杯前にはそゝのねえさん。鏡を出しておべにならして。お白粉つけて。前髪そりて。おびんを出して。おたほなをつて。島田にゆつて、赤いきれかけ。きんじやをかけて。博多の帶を太鼓に結んで。なんぶのかいかけ前へせしめて。おつまなかんで。しようへ行けば寺のじょうぼで和尚さんに遇つて。赤い心がしんじんださいばねで。これぞおりへ。やつゝさん。おかげで。恰度一かんかし申した。おめでたや。おさかう。纏ひらめ。

おんしょ。しょ。お正月が來たなれば。松を立て竹を立て。年始の御祝儀を申ませう。さぞや。おたほい。おほんな。ちよつと。持て

いく。田那のやういな大晦日。おつせんのおさきなおまつだけ。下谷のねざから女郎買ひに。下はちんぢりめんで。上は、いん、いん。こんぢりめん。すべりて、ろんで駆けくな。草薙りやりこかまふじやね。馬が來たらばはぢよける。狼來たらば人呼ばれ。ちよつせ三五郎すぐつてこ

るんで。一かんしょ。

わだじうばふ。おわばふ。かゝばふ。おんばふ。おんばら名主のじい娘。色白うや。さくら色じて。日なたで化粧して。じたかじるやへ貰はれて。其のしろやかあだのしろやで。さんだんだんすが七重ね。八重ねかさねて。そめて下さい紺屋さん。紺屋のやくなら染めてもあげましょ。はつてゝあげましょ。かたは何たうけましょか。雪降りはたんに。水にもたれた朝紅葉。その紅葉はおさくが。たもさへ流れこむ。流れこんで見

たなら。お寺のお庭へぞくるの木。

向ふのお山で鳴く鳥は。ちゅうへ鳥かには鳥か。金さぶとんの嫁か。きんせじかんせし貰つて。屏風のかげへ置たば。ちゅうへ風が引いて行つた。シヽかぬき。おひだりで引ついた。鎌倉かいどの中。いちの木。二の木。三の木。おへら。五葉松柳。やなぎの下の坊さんが。ちんちくまわちじかへれ。痛じかむ。はず。かゆじかむ。はず。たゞなくばかり。

けふから若衆じちめんすりよ。二度目にいく出て皆こじやる。かたにかたびら七子の帶よ。兩方合せてうしろちやんこじめて。しめたこゝろへこゝろはながこゝ。こゝろはよみへ。伊勢伊勢まへる。伊勢は道中のほかほちの下で。七つなる子が三つ子をうんで。産むにやうまれず下ろすにや下りや。向ふ通るはお醫者さんじやないか。醫者は醫者だが薬箱もたぬ。薬やうなるたるものを入れて。たもさへ流れこむ。流れこんで見人のが房をかくして置て。ナラベンチヨイセ。

しょうがんさえ。障子明けたら万歳か。鼓の音やらうたのこゑ。サ、ホイへへ。
 二がんさえ。西陣はやうのはかまる。あすは彼岸のお仲日。サ、ホイへへ。
 三がんさえ。おへらはやうのおひな様。かさつて見事に内裏難。サ、ホイへへ。
 四がんさえ。死んでまたくるおしゃか様。竹の柄杓でお茶あがれ。サ、ホイへへ。
 五がんさえ。こゑこほりの前かけを。正月こめよと取てゐた。サ、ホイへへ。
 六がんさえ。ふくにしめない前かけを。誰にやらふを取てゐた。サ、ホイへへ。
 七がんさえ。質屋お庫は混雑だ。質に入れたり流したり。サ、ホイへへ。
 八がんさえ。峰にさゝれて泣て來た。何か薬は無いかいな。サ、ホイへへ。
 九がんさえ。草の中には第一本。あれば子供の目の毒だ。サ、ホイへへ。
 十がんさえ。重箱さりでござへ行くの。あれいゑひすこのお使か。サ、ホイへへ。

一シトヤー。ひさ夜明くれば暖かへへ。お節り立たら松節へへ。

二シトヤー。二葉の松は色よくへへ。

三階松は上縄山へへ。

馬喰すればな日酒を飲むが ヨーヨー。 胸に苦勞がたへやせ。

十七 献 噴

十七がさしたるさし櫛。ひるたがるたか。よいくしだ。よい笛だ。お江戸で日本橋伊勢屋の番頭さんの伊勢みやげ。くし五兩で。中お三
兩で。かんざし一兩で。九兩がもの。

ほさき

春の野原にせがれをつれて。嫁なたづねをいにする。
さけで別れ。しょちゆで切れて。あさのみりんでなをし酒。

おはたら花。わじやーの花。うちへ知れたら蘭の花。

雨は降て来る裏のがやねれる。かゝは産をする米はない。

なつちよ

はあ、なつちよ踊りが今はじます。おばさんも出て見なよ。孫つれて。

おりさよ、おじさ何にもいらぬ。おこに茶漬よ。あの子お給仕に出せばよい。

盆だほんださ今日あすばかり。明日は野山の草刈りに。

盆の十四日に踊らぬやうは。木佛金佛石佛。

盆が來たきて嬉しくはないが。小豆ちやのこに南瓜じる。

××は何處行へさんじよ袋さうて。生れ在所へ種まきに。

追 分

かさを忘れる追分の茶屋へよ サーキタシヨ。 笠はすぐかさほしくはないが 笠にからたる名がほじ サーキタシヨ。

愈は片手に杖よ。おや裸体で跣足で泣きへ出るのも心から。

アーニー お前ばかりが ヨー 苦勞をさせり ヨーニー 私しも共々苦勞をする。

アーニー わら絆でおろし ヨー 刀剣ヨーニー 合ひもなさぬ切れるせぬ。

アーニー おゝ三度笠 ヨー よこちにかぶつて ヨーニー 旅は道つれ世はなきけ。

アーニー 大島小島の ヨー あえなる舟はえさし上りか ヨー なつかしや キタソイ。

アーニー 入れておくれよ上りのせつにや 港ならねば口までも。

アーニー こうなりや二人のていにやいかぬ 誠あかして人たのみ。

神樂歌

いとや神樂を舞遊ぶ。これぞ神代の始なり。右じんかなきゝのえ。らりようなの袂をおりかさし、大日本の惣社なり。皆三尺の大の社を以て
惡魔拂ふ太平樂世を改る。

カヤ十七が。シード見初めたお寺のうしろの栗畑。栗の穂を枕にして月星ながめて。夜をあかす。アースグトコドツコイドツコイシヨ。

餅 握 噴

餅はふけてもまだ酒出ない ヤンコラ。 旦那若くて氣がつかぬ ハーヨイヤサーヨイヤサーヨ。

譽め言葉

譽め申さうへ。ほめる作法は知らねど。チシちゃんさんばかり譽め申さう。ゆうべ生れた風子が。初めて栗を渡るとき。猫にこつほをくは
いらぬ。風はぢゅう。猫はやらん。やあんせボ・サ敬つて申す。(組解祝の際行ふもの)

氣遣り節

廻れかぐらさん きれるながらす ヨーヨイ〜 鶴を絶たのまひあそび ホラ ヨイ〜 ヨーイナ サーニ アリヤ リヤ コリヤリヤ サ
サ、ヤートセイ。

大津繪

摺はちのいひぐさ聞けば。私じや備前の岡山育ち。同じ勝手の道具でさう。皿やざんぶり幸せものよ。人に拭かれてしまはれて。一寸出る
にも塗にのり。勝手を下ればお湯に入る。それになんぞい私じの身は。なきなや摺子木野呂めに身をまかせ。奥の座敷も一寸も見すに。な
人の因果が田がつぶれ。

鏡がなる。つゞみ太鼓はしめて鳴る。銚子のかはりめにお手がなる。娘はそろへ嫁になる。晝も××××××がなる。清姫は蛇になる。佐
保姫は石になる。馴れた同志にあつくなる。私もしれつなくなる。明の鳥に雞の聲。

神異の眼

小濱八幡様赤いものがおすき 染であげまじよ花そめに。

やつれましたよ三ヶ月様は やつれた筈だよ やみあがり。

おふいくーーのちの人。おまいさわたしは算盤玉よ。一七十四で×××××××。二九の十八でよふくしよたいもち。四六二十四で此兒が出来て。五六三十五八四十で。出て行けなぞさば。さつてもそりやうかわ。そのよに私があきたなら。元の二七十四の白歯島田にして歸へせ。島田内なら赤いきれ掛け勝手の處へ嫁に行くはいな。

編輯の後に

安田龜一記

本調査を実施する動機は少額收入者の生活状態を統計的に知りたいのが主であつた。而して漁村に於けるそれが如何に一般のものと異つてゐるかは興味をそゝらるゝ一つであり、また方面委員制度の上からその取扱の対象たるべきものを適確に知悉してその事情の上に善所するの必要があるので、旁以て稍大規模に徹底的に調査し漁村の生活並に社會事情を知るの資となすことは最も機宜を得たるものであるとの念慮から出發したのであつた。

單に少額收入者の生活状態を目指してプランを立てゝ見ると漁村のことであり、漁民に對してもやつて見たいと云ふ氣になり、更に漁村としての一般事情を総合的に觀察する必要もあるので、所謂社會事情とも云ふべき事項までも調査することになつた。さうなると縣下一般の事情や沿岸の事情などをも對照する必要が生じだんく手が擴つて終にこんなものになつて了つた。即ち第一編を一般事情、第二編を漁業事情、第三編を少額收入者生活状態といふことにし、漁民の状態は漁業事情の中へ叙述することにした。而して漁民及少額收入者共に家族關係、經濟關係の外に住宅關係の事項をも調査したのであつた。

斯う豫定以上に手を擴げることになつたと云ふのも從來漁村に關しては世間にあまり調査考察したものあるを聞かないで、折角調査の好機會に是非漁村に關する實情を解剖し、漁村の福祉増進攻究の資に供したとい思料したからである。冀くは今後世間が漁村に對し一段深き注意を灑ぐやうになり現在漁村の恵まれ